

蔵書構築からみる日本近代文学研究の姿

——ベトナム社会科学院所蔵旧フランス極東学院日本語資料(洋装本)から

中野綾子

✉ tamayako@gmail.com

The purpose of this paper is to detail the contents of the l'École Française d'Extrême-Orient (EFEO) Collection at the Institute of Social Sciences Information Library at the Vietnam Academy of Social Sciences. The Japanese items of the EFEO collection consist of 5,642 books bound in the Western style (NBC1-5642), and 4,083 books bound in the traditional Japanese style (NBC5643-9725). Research on the collection was conducted in 2014, with detailed bibliographic information provided on the database. In 2018, all Japanese items of the EFEO collection were cataloged and the data opened to the public. In this paper, I analyze the characteristic of the collection's Western-style Japanese books that use the Nippon Decimal Classification (NDC). In the literature classification, the collection of the Japanese modern literature is less voluminous compared to that of Japanese classical literature. That is one of the reasons prompting the creation of this collection of books for Japan studies in France.

Keywords Japan studies(日本研究), Japanology(日本学), Vietnam(ベトナム), France(フランス), Modern Japanese literature(日本近代文学)

1 はじめに

ベトナム社会主義共和国の首都ハノイにあるベトナム社会科学院(Vietnam Academy of Social Sciences)に属する社会科学情報研究所(Institute of Social Sciences Information, ISSI)は、日本語資料として約11,000点、中国語資料として約31,000点を所蔵している。これら資料群は、かつてフランス極東学院(l'École Française d'Extrême-Orient, EFEO)が日本研究のために収集したものである。

ISSIの所蔵するEFEOの日本語資料の調査は、2014年に調査グループによって開始され、2015年度から2017年度までは国文学研究資料館との共同研究「ベトナム社会科学院所蔵旧フランス極東学院資料についての研究」として調査をおこなってきた。調査の目的は、ISSIの所蔵するEFEO資料群の実態や形成を明らかにすることである。そのため、ISSI側と協力しながら目録データの作成のため、書名の漢字・平仮名・ローマ字表記、著編者の漢字・平仮名・ローマ字表記、発行(書写)年、蔵書印検印、貴重書の有無の確認を進めてきた。2017年度の調査では、日本語文献のうち和装本(NBC005643-009726、4084冊)の目録データの作成が完了し、資料群の特徴や調査の経過報告がなされている¹。

そして2018年度8月には、ハノイのISSIにて和田敦彦、渡辺匡一、河内聡子、西尾泰貴、佐野愛子、中野綾子ら6名が調査にあたり、目録データの最終確認および今後ISSIにて公開するための補足調査をおこなった。

本稿では、ISSIに所蔵されるEFEOの日本語資料の洋装本の特徴を日本十進分類法(NDC)から分析する。また文学分野において、いかなる日本近代文学に関する書物が含まれているのかを明らかにし、フランス極東学院にておこなわれた日本研究の可能性をみることにしたい。先に結論を述べると、近代文学に関わる資料には偏りがみられるのだが、こうした蔵書体系が作られた要因を、フランスにおける日本研究の状況から探っていく。

2 フランス極東学院からベトナム社会科学院へと資料が渡るまで

フランス極東学院(EFEO)によって収集された資料が、ベトナム社会科学院(ISSI)へといかにして渡ることになったのか、ここで確認をおこなっておきたい²。

フランス極東学院の前身となるインドシナ考古学研究所(Mission Archéologique d'Extrême-Orient)が、フランス領インドシナ総督ポール・デュメ(Paul Doumer)によってサ

1 渡辺匡一「ベトナム社会科学院・旧フランス極東学院日本語資料調査の経過報告—和装本資料群の特徴について—」、佐野愛子「ベトナム社会科学院所蔵の「異国渡海御朱印帳」、「異国近年御書草案」、「異国御朱印帳」および「安南記」、「安南来状」について」(『リテラシー史研究』10号、2017.1)。

2 和田敦彦「ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院資料—東南アジア地域の日本語図書調査から—」(『リテラシー史研究』7号、2014.1)。

イゴンに設置されたのは、1898年のことである。インドシナ考古学研究所は、考古学・文献学に重きを置き、インドシナの歴史、遺跡、言語の研究をおこなうことを目的とした研究所であり、1900年にはフランス極東学院へと改称をおこなっている。それがハノイへと移転するのは、1901年の総督府の移転に伴ってのことである。さらに、1920年には、法人組織へと改組し、総督府からの補助金によって運営がなされることとなった³。

そして戦後1957年に、フランス極東学院は、移転したハノイから、フランス本国へと撤収することとなる。フランスでは、70年代に組織の改編が進められ、現在はアジアには17支部が設けられ、研究活動がおこなわれている。日本では1966年に京都、1994年に東洋文庫に支部が設けられている。

1901年からは機関誌『フランス極東学院紀要』が刊行され、西欧におけるアジア研究を牽引し、アジア各国の学術的な交流の窓口とみなされてきた。この機関誌の報告からは、1922年の時点で、日本語図書は、古典籍が533タイトル(3909冊)、洋装本が805タイトル(2682冊)で、総計1338タイトル(3500冊)を超える蔵書となっていたことが確認できる⁴。別の調査では、1922年には1285タイトル(6400冊)であり、1939年には約2000タイトルとなったとも記されている⁵。正確な冊数は不明ではあるが、1883年からベトナムはフランスの保護国となり、1940年には進駐した日本とフランスによる共同の統治体制が築かれ、その後アジア太平洋戦争の終戦にかけて蔵書はさらに増加したと考えられる。

芝崎厚士は、国際文化振興会の活動が次第に対外文化工作へと展開する過程を詳しく論じているが⁶、その影響を受け、日本の国際文化振興会はとくにフランス領インドシナにおける文化交流を密にしている。こうした活動の拠点となった場所がハノイの日本文化会館であり、フランス極東学院を介して学術交流をおこなうことになる。ハノイ日本文化会館は1943年11月に開館され、44年にはサイゴンの分館が開館するも、1945年には、終戦に伴い活動を停止している。ただし1946年に小牧近江が引き上げる際、日本文化会館に集められた蔵書は、のちのベトナム共和国大統領補佐官でもあるゴ・ディン・ニュー(Ngo Dinh Nhu)のアドバイスによって、すべてフランス極東学院へと寄贈され、それが今に伝わっている⁷。

そうしてフランス極東学院に集められた書物は、1957年にフランスへと撤収する際に、ベトナムの社会科学院のISSIへと引き継がれることとなる。その調査の過程や書物の保存状況については、和田敦彦の論に詳細が記されているので参照されたい⁸。

3 山下太郎「極東フランス学院図書館に就て」(『図書館雑誌』, 1941.4).

4 "Japon", L'École Française d'Extrême-Orient, Depuis Son Origine Jusqu'en 1920, Le Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient, XXI, 1922.

5 山下太郎「極東フランス学院図書館に就て」(『図書館雑誌』, 1941.4).

6 芝崎厚士『近代日本と文化交流』(有信堂, 1999.8).

7 在仏印日本文化会館の設立経緯や役割、また所蔵図書については以下を参照。和田敦彦「在仏日本文化会館関係資料について」(『リテラシー史研究』11号, 2018.1).

8 和田敦彦「ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院資料—東南アジア地域の日本語図書調査から—」

3 洋装本の特徴—日本十進分類法(NDC)から

ISSIに所蔵される1万1千冊の蔵書のうち和装本は4084冊であるが、それら和装本については、渡邊匡一が日本十進分類法(NDC)に準拠して分類・整理をし、蔵書分析をおこなっている⁹。詳しくはそちらを参照してほしいが、所蔵される和装本の特徴として、「歴史を柱に哲学、思想、美術・芸術各分野を合わせたかたちで形成」されていることが確認できる。また、「哲学・思想分野では国学・神道者の著書、文学分野では古典作品の注釈・研究書を中心に収集が図られ」、「美術・芸術分野では能」を中心とした収集がおこなわれている。能に関する収集は、後述するフランス極東学院司書のノエル・ペリーが書物の収集に携わっていたことが原因していると考えられよう。

今回、洋装本5642冊を日本十進分類法によって分類するにあたっては、渡邊と同様に全体の傾向を明確化するためにも、国学者や神道家が記した歴史、文学系の書物については、すべて哲学・思想分野の資料として扱っている。またEFEOの日本語資料は1冊1タイトルとして管理されているが、雑誌や複数冊のものを1タイトルとして数えなおすと、2495タイトルとなる。タイトル数の多い順では次のような分類結果となった。

	分類	タイトル数(割合)	冊数(割合)
1	歴史	558(22%)	1750(31%)
2	文学	553(22%)	963(18%)
3	社会科学	427(17%)	900(17%)
4	哲学・思想	344(14%)	1016(19%)
5	言語	190(8%)	269(5%)
6	芸術・美術	187(8%)	323(6%)
7	総記	118(5%)	202(4%)
8	産業	54(2%)	82(2%)
9	自然科学	37(1%)	94(2%)
10	技術・工学	27(1%)	40(1%)

(『リテラシー史研究』7号, 2014.1).

9 渡邊匡一「ベトナム社会科学院・旧フランス極東学院日本語資料調査の経過報告—和装本資料群の特徴について—」(『リテラシー史研究』10号, 2017.1). 渡邊が出した割合は以下の通りである。

	分類	タイトル数(割合)	冊数(割合)
1	歴史	236(30%)	1529(37%)
2	哲学・思想	170(22%)	737(15%)
3	芸術・美術	128(17%)	607(16%)
4	文学	100(13%)	404(10%)
5	社会科学	62(8%)	273(7%)
6	言語	55(7%)	299(6%)
7	総記	15(2%)	107(3%)
8	自然科学	6(1%)	129(3%)

和装本との所蔵内容の違いは、まず産業、技術・工学に分類される書物が所蔵されたことである。産業に分類される本のなかには、『仏印の鉱産資源』(NBC04531)や『東亜交通政策要論』(NBC05101)のような日本や仏印の産業構造についての解説や展望を語る書物が分類されている。また、技術・工学分野では、『航空経営論』(NBC04596)などの航空関連書籍、日本や中国の建築物に関するものがあり、『主婦之友』(NBC00899・NBC00900)も2冊含まれる。

自然科学分野では、『地学雑誌』(NBC01344-)が合本で35冊分あり、その多くを占める。ただし、ほか人文科学分野よりも所蔵数は圧倒的に少なく、洋装本の分類からも和装本と同様、EFEOの日本研究が、歴史や文化を中心とした研究であったことがうかがえる¹⁰。

また、和装本では分類がなされなかったものに、言語分野があるが、これは主に日本語辞書や文例集、またはフランス語の教則本である。ベトナム語、中国語、ハンガルの教則本も少数だが含まれている。フランス極東学院において、日本におけるフランス語理解の状況を調査するためであったと考えられる。

これらの蔵書の収集を支えていたのが、総記に数多く分類される古書店や図書館の目録である。現在も神保町にて営業を続ける古書店・北沢書店のアジア関係書を集めた目録“Far East” Catalogue of second-hand book(NBC03789)や金港堂の『図書目録』(NBC03780)、また『東京帝国大学付属図書館和漢書書名目録』(NBC00890-)などがそれにあたる。書物の購入に関しては、古書店の値札やシールが残されているものもあり、これら日本の目録類を参考とし、日本研究のために書物の選別がおこなわれていた様子がうかがえる。次節からは、残る分類の特徴をみていくこととする。

4 人文科学・社会科学分野の特徴

4.1 歴史分野資料群

歴史分野では、歴史473タイトル、地理107タイトル、伝記27タイトルとなっている。

歴史に分類される中心的な書籍は、『大日本史料』(NBC00180-)71冊、『大日本古文書』(NBC00275-)61冊、『古事類苑』(NBC00073-)52冊等をはじめとした歴史研究の基本資料である。そのほかには、『校訂史記評林』(NBC05317-)50冊、『国史叢書』(NBC02658-)33冊、『国史大系』(NBC00758-)32冊、『文選集注』(NBC04415-)27冊などがある。

基本的にはまんべんなく歴史研究の基本資料が集められているが、そのなかでも『徳川十五代史』(NBC00445-)12冊など、江戸時代に関する書物、『日清戦史』(NBC01011-)や

¹⁰ 分類ではわからない特徴として、日本語以外で書かれた書物がある。ハンガで書かれたものは17冊、英語で書かれたものは6冊、フランス語で書かれたものは4冊である。フランスや英語のものは語学教則本が多い。いくつかのものに関しては、すでに書物の状態により、タイトルや文献内容が未詳のものは7冊ある。

『明治三七八年日露戦史』(NBC02698-)など、日清日露戦争に関する書物が多い。

日本以外では、和田清『中国史概説』(NBC05247)や恒屋盛服『朝鮮開化史』(NBC01088)藤岡通夫『アンコール・ワット』(NBC04638)加藤長雄『印度民族運動史』(NBC04581)など周辺諸国のものがある。また三輪徳三『英国植民史』(NBC01859)など、植民の歴史を扱ったものもみられる。ただし、これら周辺諸国の文献は、現在進行形の文化を扱ったものが多くそれらは社会科学へと分類している。

また歴史に関しては、基本資料だけではなく、『史学雑誌』(NBC00326-)84冊、『東洋学芸雑誌』(NBC01984-)45冊、『東方学報』(NBC03951-)43冊など、学会誌の収集も広くおこなわれている。さらには『国学院雑誌』(NBC02017-)42冊をはじめとし、『台北帝国大学文学部史学科研究年報』(NBC04231-)、『天理大学学報』(NBC05288-)、『名古屋大学文学部研究論集II 史学』(NBC05106-)、『京都帝国大学文学部考古学研究報告』(NBC02332-)など、大学紀要までも目が配られている。

地理分野に関しては、『日本地理大系』(NBC03560-)17冊、『大日本地誌』(NBC00516-)7冊など、基本的資料があるほか、和装本と同様に各国の名所図会(『都名所図会』など)や日本や近隣諸国地図が所蔵される。

このように、歴史分野資料群では、研究における基本的資料を中心に最新の動向を追うことができるよう、総合的な収集がおこなわれたとみられる。

4.2 哲学・思想分野資料群

哲学・思想分野では、344タイトルのうち、中心を占めるのが187タイトルある仏教関連の資料である。収集方針については、私の手に余るため、ここはいくつかの資料を紹介するにとどめたい。仏教関連では、『南伝大蔵経』(NBC04247-)67冊や『国訳一切経』(NBC03859-)64冊、『大日本仏教全書』(NBC02604-)48冊、『国文註釈全書』(NBC01784-)19冊などの叢書が数多く所蔵されている。そのほか、キリスト教関連は9タイトル、儒教や中国思想に関する書物が含まれる¹¹。

一方、和装本では仏教関連よりも多かった神道・国学関連は48タイトルに留まっている。その中心は、和装本に多数収録されていた『平田篤胤全集』(NBC02176-)12冊や『本居宣長全集』(NBC00163-)8冊をはじめ国学者の全集である。神道関連で、日本国内に所蔵の少ない書物として、神職の教育養成機関である皇典講究所による『皇典講究所講演』(NBC00932-)がある。神道・国学分野の減少と対応するように増加しているのが、雑誌『哲学研究』(NBC03102-)など京都学派に関するものや国体に関する書物である。井上哲次郎による雑誌『東亜之光』(NBC00047-)をはじめ、『国体の本義』(NBC04625-NBC04627)は、日本文化会館に所蔵されていたものも含めて3冊の複本があり、書き込みが確認で

¹¹ そのほかハングル語文献として、金泰治『普徳閣氏の縁起』(NBC04155)、『聖異次頓の最後』(NBC04152)が含まれている。

きる。

とくに、前節で述べたようにハノイ日本文化会館は、戦時下には仏印における対外政策を担い、その蔵書は1946年に寄贈された。哲学・思想分野において「在仏印二本文化会館」の蔵書印が押された書物の一部を挙げると、倉野憲司『古典と上代精神』(NBC04554)、曾根朝起『神社と国民性』(NBC04512)、館野覚治『皇武』(NBC04611)、大杉謹一『聖訓述義』(NBC04513)といった国体に関する書物や柳田謙十郎『実践哲学としての西田哲学』(NBC05635)など、1940年代日本の思想状況を示すもの、また笠間杲雄『大東亜の回教徒』(NBC04526)、水谷乙吉『安南の宗教』(NBC04543)といった外地における宗教状況に関するものが中心となっていることがわかる。

在仏印日本文化会館に所蔵されていた書物を除くと、フランス極東学院にて、日本研究という名目で集められた洋装本は、哲学・思想分野に関しては、和装本に引き続き、仏教を中心に基本資料を抑えた選書がおこなわれ、国学・神道関連の書物は和装本を補うように全集類が主に集められていたことが確認できる。

4.3 社会科学分野資料群

和装本では所蔵が少なかったものの、洋装本で増加した分類がこの社会科学分野である。ここに分類したもので、多くを占めるのは、合本で92冊にもなる『太陽』(NBC03988-)と『風俗画報』(NBC00111-)56冊である。日本社会の状況をつぶさに確認するものとして、雑誌類は多く所蔵されていたと考えられよう。

また、横山源之助『日本之下層社会』(NBC02970)を筆頭に、谷口雅徳『日本歴史之裏面』(NBC01294)、川上峨山『魔窟之東京』(NBC05428)、村上助三郎『東京闇黒記』『東京闇黒記続編』(NBC02998、NBC03000)など、日本社会の暗部を描いたルポルタージュも積極的に収集されている。それは、江戸時代の風俗や人情ものに関する奇書・珍書を集めた『燕石十種』(NBC05175-)、『続燕石十種』(NBC01082-)、『新燕石十種』(NBC04764-)が選書されていることにも表れている。同時に、柳田国男『日本の祭』(NBC05542)、早川孝太郎『花祭』(NBC05242)、『民俗学研究』(NBC04471)など、民俗学関連の書物も所蔵されている。

このように日本文化の側面を映し出す書物が集められると同時に、『日本財政経済史料』(NBC05301-)10冊や『日本教育史資料』(NBC00464-)9冊、さらに内閣統計局による『日本帝国統計年鑑』33冊など、基本的資料の収集も欠かさずおこなわれているといえるだろう。

一方で日本文化だけではなく、『ニューギニアの自然と民族』(NBC04646)、『仏印の新経済政策』(NBC05054)、『外務省通商局蘭領東印度事情』(NBC01120)といった、近隣諸国の経済・政治・文化について述べた日本語資料もみられる。ただし歴史分野では、12冊であったハノイ日本文化会館所蔵資料が社会科学分野には、80冊含まれていることには

注意が必要であり、とくにこれら近隣諸国の文化に関する書物は日本文化会館所蔵のものが多い。

社会科学分野に関しては、現在進行形の文化状況を知るためにも総合的な収集がおこなわれていることがわかるものの、とくに日本以外の各国に関しては、日本文化会館が収集した書物によっている。それはフランス極東学院の日本研究という性質、なかでも次節で述べるように研究の中心を担っていたルメートルとペリの両者が歴史および文学・芸術研究を中心としていたことに起因すると考えられる。

4.4 芸術・美術分野資料群

この分野では美術に関する資料が57タイトル、演劇に関する資料が77タイトル、また海外の美術に関するものが38タイトル含まれている。

美術分野については、和装本では江戸時代の著名作品が数多く収集されていたが、洋装本では東洋美術に関するものが中心となっている。また作品よりも、研究書を中心とした構成となっている。とくに、日本美術院『日本美術』(NBC01206-)が合本で28冊、美術研究会『美術研究』(NBC03760-)も合本で23冊と揃えられている。そのほか、浜田耕作『東洋美術史研究』(NBC05419)や矢代幸雄『東洋美術論考』(NBC04324)など個別の研究書が中心となる。さらに、東京帝室博物館『日本帝国美術略史』(NBC04685)や京都帝室博物館『古美術品図録』(NBC02845)のように、帝国博物館の所蔵資料しも目が配られている。

演劇分野では、浄瑠璃、歌舞伎、能に関するものがほとんどを占める。和装本とは異なる点は、脚本ではなく、能楽館『能楽』(NBC02979-)大和田建樹『謡曲評釈』(NBC01813-)などの、研究書や雑誌を中心とした収集となっていることだろう。

また海外の美術・芸術に関する書物では、審美書院による『西域画聚成』(NBC04375-)、下中彌三郎『世界美術全集』(NBC05397-)などの叢書が集められており、日本の芸術・美術分野が研究書を中心としていたものとは、傾向を異にしている。

芸術・美術分野の日本語資料は、日本のものに関しては、和装本で集められていた作品の評釈・研究書を中心としており、日本の古典的演芸・美術に関する研究をおこなうための基礎的な資料を集めつつ、最新の研究状況をも知ろうとする状況がうかがいあがってくる。

4.5 文学分野資料群

文学分野では、明治期以前の作品の復刊・採録、作品の解説・注釈が、345タイトルと大部分を占めている。明治期以降に新たに執筆された作品やそれに関する解説等は、78タイトルにとどまる。また、海外の文学に関するものは50タイトルに過ぎない。

EFEOに所蔵される和装本は、江戸時代以前に出版されたものだけではなく、その多

くが明治時代に出版されたものであった。和装本では、古典作品の注釈・研究所が中心に収集されていたが、洋装本では、注釈・研究書だけではなく、古典作品も多く含まれている。

たとえば和装本で欠けのあった丹鶴叢書(NBC02626-)12冊や『群書類従』(『新群書類従』『続群書類従』『続々群書類従』含め)62冊は洋装本に収められている。そのほかの作品として、『吾妻鏡(吉川本)』『栄花物語』『源氏物語』『古今和歌集』『古今著聞集』『新古今和歌集』『太平記』『徒然草』『土佐日記』『平家物語』『枕草子(前田本)』『栄華物語』などが挙げられる。また、『国文大観』(NBC00663-)9冊、『徳川文芸類従』(NBC02786-)12冊、『江戸時代文芸資料』(NBC01700-)5冊、『近世文芸叢書』(NBC03079-)11冊、博文館の『日本文学全書』といった叢書類も多く収められる。とくに作品の収集の中心となったのは、明治期に刊行された各種文庫本である。博文館の帝国文庫、俳諧文庫、少年必読日本文庫、富山房の袖珍名著文庫など、これらの文庫本が和装本では所蔵の少なかった作品を補強するものとなっている¹²。

このように、古典作品については、和装本と洋装本の資料状況を相互補完的にみていく必要がある。ただしこれら明治期に再刊行された古典作品については、私の手に余るため、以降は洋装本に含まれる明治期以降に新たに書かれた作品に関する蔵書の特徴をみていくこととしたい。

5 日本近代文学関連資料の状況

前節にてみてきたように、ベトナム社会科学院に所蔵されるフランス極東学院の日本文学資料群のなかでも、文学分野では、古典作品に比して、明治期以降に新たに書かれた作品やそれに付随する解説や研究書は、78タイトルと少ない。そこには、戦前のフランスにおける日本の研究が、東洋学から派生した古典研究を中心とした日本学であったことが大きな背景にある。では具体的にどのような書物が含まれているのかを確認していきたい。和装本では、古典作品自体の所蔵が少ない点が指摘されていたが、明治期以降の作品についても同様のことがいえる。そのため、ISSIのEFEO資料群からみる日本近代文学の姿は、一般的に流布する作家や文学史の姿とは異なる相貌をみせることとなる。

まず多くの作品が所蔵されている作家として尾崎紅葉と幸田露伴の二人が挙げられる。紅葉は、『金色夜叉』6編(NBC04756-)のほか、『尾崎紅葉全集』全6巻(博文館、1904、NBC03694)。露伴は、『蝸牛庵夜譚』(春陽堂、1907、NBC01270)、『小品十種』(成功雑誌社、1908、NBC01474)、『頼朝』(東亜堂、1908、NBC00728)、『露伴叢書』(博文館、190

¹² 調査の関係上、文庫としてはっきりと現在確認ができているのは113冊である。だが、著者名からはより多くの文庫が所蔵されていることが推測できる。

2、NBC03532)、『出廬 心のあと』(春陽堂、1905、NBC02475)が所蔵される。紅葉と露伴の書物は、明治30年代後半から40年前半に刊行されたものが中心となるが、それはフランス極東学院が1901年にハノイへと移転し活動を展開しており、同時代的な日本文学の姿を映し出すものとして集められたと考えられる。

同時期に刊行された作品で所蔵される数はごく少数に限られる。すべてを挙げて以下通りである。夏目漱石は『吾輩は猫である』揃(大倉書店、1905-1907、NBC00979-)と『夏目漱石集』(NBC04755・刊行年不明、「坊っちゃん」「草枕」「道草)が所蔵されているのみであり、そのほか、徳富蘆花『不如帰』(1902、NBC01632)、国木田独歩、枝元長汀『征露軍人吟詠集』(1905、NBC01475)、櫻井忠温『肉弾』(1906、NBC02823)、徳富猪一郎『吉田松陰』(1909、NBC00729)、菊池幽芳『琉球と為朝』(1908、NBC04990)である。

『不如帰』は、当時のベストセラーとして所蔵されたと考えられるが、『征露軍人吟詠集』や『肉弾』は、作品そのものよりも、歴史分野で注力された日清日露戦争関連書籍として収集された目的の方が強いだろう。また、『吉田松陰』や『琉球と為朝』もまた、伝記や民話として歴史研究のために収集された可能性が高い。

また作品の比較的多い紅葉や露伴は校訂者として各種文庫に名前が記される。紅葉は『俳諧類題句集』のみだが、露伴は曲亭馬琴『夢想兵衛胡蝶物語』や西行法師『山家集』などの校訂者として記され、むしろ所蔵作品よりも校訂本の収録数の方が多いほどである。

このほか明治に刊行された作品では、島崎藤村『藤村詩集』(1904、NBC01216)が2冊所蔵されているほか、土井晩翠『天地有情』(1899、NBC01482)薄田泣菫『ゆく春』(1901、NBC03075)などの韻文があるのみである。このように、図書館設立後に刊行された作品は、比較的名のあるものが所蔵されてはいるが、その後は菊池寛『受難華』(1927、NBC01480)まで作品が収録されることはなく、大正期の作品が抜けた状態となっている。

たとえば、大正に多くを公表した志賀直哉作品は所蔵されていない一方で、志賀が好んだ日本の古典芸術をコロタイプ印刷で刷った瀟洒な『座右宝』4巻(1926、NBC03167-)は所蔵されており、文学者としての姿以外がクローズアップされることとなる。

また、大正期以後も所蔵数は少なく、戦前に刊行された作品や随筆等としては、二葉亭四迷『平凡』(改造文庫、1930、NBC01629)の文庫版や有島武郎『武郎創作全集』第四巻(1939、NBC01478)、斎藤緑雨『あられ酒』(1939、NBC01661)、川端康成『花のワルツ』(1940、NBC02996)、島崎藤村『文学読本』(1942、NBC05378)、室生犀星『泥雀の歌』(1942、NBC04459)、邦枝完二『花あやめ』(1943、NBC00828)、小宮豊隆『人と作品』(小山書店、1943、NBC01673)、岡田八千代『白蘭』(1943、NBC05379)、森三千代『南溟』(1945、NBC01630)が所蔵されるのみである¹³。

¹³ 戦後の作品は、竹内好『世界文学はんどぶつく魯迅』(1948、NBC03530)と窪田空穂『短歌に入る道』(1949、NBC01479)の2冊である。

岡田八千代は、昭和初年にフランスへ訪問し『白蘭』にはそのエッセイを執筆している。また森三千代は、1942年に対仏印日本婦人文化使節として、外務省から派遣されベトナムへも訪れている。これら女性作家が所蔵された背景は推測できるものの、そのほかの作品群に規則性を見いだすことは現時点では難しい。このように、作品の所蔵が少なく、統一性も見いだしがたいのがEFEOにおける近代文学作品の収集状況だといえる。

雑誌については、どうだろうか。明治期の雑誌では、『帝国文学』合本17巻分(1895-1911、NBC00972)、『文学評論しがらみ草紙』1巻-59巻(欠号含む)(1889、NBC05155)、『文芸倶楽部』(博文館、年月日不明、NBC00532)がある。昭和に入れば、『中央公論』合本4冊分(1927頃か)、『改造』合本15巻分(1939-1940、NBC02388)、『文学』(1/6/11/16号、岩波書店、1931-1932、NBC05372)『幼年倶楽部』(大日本雄弁会講談社、1943、NBC01842)が集められている。

明治期は、種類は多くはないが、集中的に集められていることがわかる。だが、作品と同様に大正期の雑誌の所蔵はなく、昭和に入ると『改造』が中心となっている。このように作品や雑誌類では、幅広い所蔵は難しかったようだが、文学史に関する書籍は比較的集められていたことがうかがえる。たとえば新潮社『日本文学講座』4巻(1926-1927、NBC01059)、岩波書店『岩波講座日本文学』15巻(1931-1932、NBC01711)といった叢書類が集められており、そのほか表1に現したように22冊の文学史関連の書物が収められている。

ハルオ・シラネが、日本文学の古典の創造が、近代以降の国民国家形成と連動しておこなわれたと指摘する通り¹⁴、文学史はその国を研究するうえで、それ自体が重要な研究対象となる。とくに明治後期に刊行された、三上参次・高津楯三郎による文学史や芳賀矢一や岩城準太郎などの国文学史がよく集められている。

このように、日本近代文学に関する書物は、明治後期のものは著名作品や作家のものが集められていることを確認することができるが、その後大正期に入ると急激にその所蔵が減少していく。昭和になると方向性は見いだすことができないものの、いくつかの所蔵を確認することができる。たしかに古典と比すれば数は少ないが、明治後期の所蔵をみれば、ある程度は同時代の日本文学作品や研究書を収集しようとしていた萌芽をみることはできる。ではなぜ、大正期以降はそれが継続されなかったのだろうか。その要因を、フランス極東学院における日本研究の変遷からみていきたい。

14 ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典』(新曜社、1999)。

【表1】文学史及び研究書一覧

著者名	タイトル	出版社	刊行年	所蔵番号
三上参次 高津鎌三郎 落合直文	『日本文学史上下』	金港堂	1892	NBC05625 NBC04924
三上参次 高津鎌三郎	『日本文学小史教科適用』	金港堂書籍会社	1893	NBC00955
関根正直	『歴代文学』 『歴代文学続編』	哲学書院	1894 1895	NBC04989 NBC04760
坪内逍遙	『文学その折々』	春陽堂	1896	NBC05158
大和田建樹	『日本大文学史巻之一』	博文館	1899	NBC03664
芳賀矢一	『国文学史十講』	富山房	1903	NBC02476
阪本健一	『社会文学辞典』	宝文館	1903	NBC01217
鈴木暢幸	『日本文学史論』	富山房	1904	NBC00827
岩城準太郎	『明治文学史』	育英舎	1906	NBC01633
朝倉無声	『日本小説年表』	金尾文淵堂	1906	NBC05314
五十嵐力	『新国文学史』	早稲田大学出版部	1912	NBC01448
三浦圭三	『綜合日本文学全史』	文教書院	1926	NBC01448
赤堀又次郎	『日本文学者年表』	大日本図書	1926	NBC04192
野村八良	『国文学研究史』	原広書店	1926	NBC01077
植松安	『国文学史概説』	広文堂	1928	NBC05006
	『現代日本文学大年表(現代日本文学全集)』	改造社	1931	NBC04753
藤田徳太郎	『国文学雑説』	六文館	1932	NBC02933
次田潤	『国文学史新講』	明治書院	1932	NBC00861
三枝博音	『日本の文学への眼』	朝日新聞社	1942	NBC01663
日本文学懇話会	『日本文学の諸相』	日本文学懇話会	1942	NBC04932
浅野晃	『明治文学史考』	万里閣	1944	NBC00929

6 フランス極東学院における日本研究の変遷

フランス極東学院における日本語資料の所蔵状況は、フランスにおける日本研究の進展と関連していると考えられる。フランス極東学院には、フランスやその他近隣諸国から研究者が研究員として所属し、研究を続けているが、そこでおこなわれた日本研究、日本語資料の収集において大きな役割を果たしたのは、2人のフランス人研究者であった。

一人目は、1901年にフランス極東学院の研究員になり、1908年に三代目学院長となったクロード・メートル(Claude Eugène Maitre)である。メートルは、1898年から奨学生として日本で学び、日本美術を専門とした。極東学院にて日本研究を担当し、それ

に伴う幾度かの日本来訪の際、研究をおこなうかたわらに書物の収集にあたっている。そのほか、古代仏教建築などに関する自身の研究を進め、日本国内における交流をおこなっていた¹⁵。その後1914年に帰国して従軍し、第一次世界大戦後には、ギメ美術館の副館長となり、フランス極東学院の研究から離れると、1925年に早くも亡くなっている。

さらに、極東学院にて研究員および司書を兼務していたメートルの友人でもあるノエル・ペリ(Noël Peri)も、書物の収集において重要な仕事を果たした。ペリは、1889年に宣教師として来日し、日本語を学び、信州の松本に司祭として赴任している。のち東京にもどると、東京音楽学校に教師として勤務、また能楽研究者としても日本国内で研究活動を活発におこなっている。1903年には、日本に来訪中のメートルと出会い、その後1907年からはフランス極東学院の研究員に着任、その年の暮れから1908年、1913年、1914年、1918年にわたって日本に長期滞在し書物収集や美術品の購入がおこなわれたが¹⁶、1922年に惜しくも自動車事故で早世している。ペリによってフランスの日本研究は、「第一次世界大戦前後から日本学として成立し、やがてイギリスやドイツの日本学の水準にまで高められたと言われる¹⁷」ほどの研究をなしえたと言われている。

メートルとペリという二人のフランスにおける日本研究の中心人物が1914年そして1922年と極東学院を去った結果、1920年代以降の極東学院では、アンコール考古学に対する重要度が増していくこととなった¹⁸。

だが戦間期になると、1924年には東京に日仏会館が設立され、極東学院の状況とはうらはらにフランスにおける日本研究は一層の高まりをみせる。フランスにおける日本及び東洋一般に関する研究の発展を目的としたこの日仏会館の結成は、当時の駐日大使ポール・クローデルと渋沢栄一の協力のもと、両国の研究発展のために設立されたのである。

1920年から30年代には日仏会館へ多くの東洋学者が来日し、研究をおこなうこととなった。だが、日本を研究する研究者は実は少なく、ノエル・ペリの評伝を書いた日仏会館理事の杉山直治郎は、来日する研究者が中国研究者に偏っていたとも述べる。藤原貞朗は、こうした状況が、「大戦中に結ばれた日仏の同名の関係を基盤に、フランス文化を日本に普及する施設を作り、「フランス東洋学の威光を国際的に示す」文化戦略が目的であったことに起因している」と述べている¹⁹。その際、日仏会館において研究者とし

15 L.Aurousseau, "Claude Eugène Maitre", Le Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient, XXV, 1925.

16 ペリの研究活動については、フランス法学者杉山直治郎「ノエル・ペリーの生涯と業績」(『日仏文化』第9集, 1944)が詳しい。また古川久『欧米人の能楽研究』(東京獅子大学学会, 1962.12)でもペリの能楽研究が挙げられている。

17 河合満朗「フランスにおける日本研究」(『日本研究』10, 1994.8).

18 藤原貞朗「20世紀前半期におけるアンコール遺跡の考古学と仏領インドシナの植民地政策」(『日本研究』26号, 国際日本文化研究センター, 2002).

19 藤原貞朗「大戦間期の日仏会館の東洋学者とフランス極東学院一日仏会館創設に関する新資料の紹介」(『日仏文化』83号, 2014).

て招聘しようと考えられていたのが、先のメートルとペリの二人であった。だが、両者ともに直前に亡くなってしまっており、だからこそ日仏会館への来日研究者が東洋学者ばかりだとの印象をあたえたと考えられる。

さらに、この時期には、フランス本国でも、日本学研究所や高等研究実習院といった日本研究所が相次いで日本研究者を集め、その地盤を強めた時期にあっており、日本研究の中心地はベトナムにあるフランス極東学院からフランス本国へと移行することになったのである。

たとえば、この時期のフランスで活躍した日本研究者には、シャルル・アグノエルとセルジュ・エリセーエフの二人がいる²⁰。アグノエルは、東京日仏会館の最初の研究員として活躍し、日本研究者の養成に尽力をした。1932年にはパリへ帰国し、高等研究院や東洋語学校で講義を担当している。また、エリセーエフは、1889年にペテルブルクに生まれ、1908年来日し、東京帝国大学に入学し、日本文学を研究した人物である。その後1914年にはロシアに帰国するが、1921年にはパリへ亡命、研究を継続することとなる。1923年には、先のメートルが創刊した雑誌『日本と極東』の刊行に協力し、志賀直哉、谷崎潤一郎、永井荷風、芥川龍之介、久保田万太郎、長谷川如是閑、菊池寛、里見敦らの作品を翻訳・紹介しているという。

このように、フランスにおける日本研究の中心地は、1920年から30年の間に、ベトナムのフランス極東学院から、東京日仏会館そしてフランス本国での各研究所へと移っていくことになる。現在、ベトナム社会科学院に所蔵されるフランス極東学院の日本語資料において、とくに日本近代文学関連の資料が、明治後半を中心として集められている背景には、メートルとペリというフランスにおける日本研究の基礎を築いた二人が1920年代に相次いで亡くなったことの影響があるといえよう。

7 おわりに

では、メートルやペリの去った後、ベトナムのフランス極東学院における日本研究を担当する研究者がいなかったのかといえば、そうではない。1930年代以降、極東学院に勤め、司書として勤務をしていたのが、金永鍵である²¹。いわば、フランス極東学院における日本研究は、フランス人ではなく、外部から来訪した研究者によって継続されることとなった。

1910年に京城(現在のソウル)に生まれた金永鍵は、京城第二公立高等普通学校を卒業し、上海や南京でフランス文学を専攻したのち、京城フランス総領事館に勤務してい

²⁰ 以下、フランスの日本研究者については、森川甫「フランスの日本研究」(『関西学院大学社会学部紀要』46号, 1983.3)を参照。

²¹ 尹大栄, 李美智訳「1930-40年代の金永鍵とベトナム研究」(『東南アジア研究』48巻3号, 2010)。

た。領事館の周旋により、フランス極東学院へ司書として赴任することが決定したのは1931年のことで、しばらく助手的な働きをしたあと、1932年5月1日には正式に雇用されている。その際には、現地職員のレ・ズ(Lê Dur)から日本書籍部の補助司書を引き継ぎ、日本と韓国の資料の管理を担当することとなった。また1936年には日本図書室主任となり、蔵書の購入にあたっている。

金永鍵は、多くの寄贈をおこなっており、日本語資料のなかにハングルのもが含まれているのも、この金永鍵を介したものであることがわかっている。このように、1930年から1940年にかけては、メートルとペリに代り、金永鍵が日本語資料の管理の中心人物として活躍をしたのである。そのほか、金永鍵はベトナムのホイアンにおける日本町の研究に着手したり、同僚のベトナム人研究者チャン・ヴァン・ザップ(Trần Văn Giáp)らと共に、仏教関連の研究成果の発表をしたりしている。金永鍵の動きは、当時のフランス極東学院における国際的な研究のありさまを良く伝えるものだといえよう。

ただし金永鍵は、1940年頃にはハノイから日本へ移住し、その後は韓国へと戻り政治活動にはいっており、日本語書物の管理者が移行している。その後、フランス極東学院における日本語資料の管理者が誰に移っていったのか、またメートルとペリや金永鍵と共に研究をおこなったベトナム現地の研究者たちの状況や日本語書物との関係性についてはまだ不明な点も多く、今後の課題としていきたい。

現在、ベトナム社会科学院におかれるフランス極東学院の日本語資料の棚には、フランス極東学院所蔵印が付いていない、おそらく寄贈後に社会科学院にて購入されたと考えられる、近代文学全集が50巻ほど併置されている。和装本の欠けを補うように、明治期の各種文庫本が大量に購入されたのと同じように、後年になって作品の所蔵が全集によっておこなわれたのだろう。このようにベトナム社会科学院における旧フランス極東学院の日本語資料からは、そこでおこなわれていた日本研究の足跡をたどることができる。

現在作成された目録データは、社会科学院だけではなく、国文学研究資料館データベースや欧州各国所蔵日本古典籍データベース(コーニッキ版欧州所在日本古書総合目録)とも連携がとられている。また、ベトナム社会科学院が所蔵する約33000点に及ぶ中国語文献の調査も課題となるだろう。この場が、東南アジア地域だけではなく、さまざまな地域の研究者によって利用され、新たな研究がおこなわれる場として機能していくことが期待される。

参考文献

- 河合満朗(1994)「フランスにおける日本研究」『日本研究』10号. Kawai mituo(1994) France ni okeru nihon kenkyu. *Nihon kenkyu* Vol.10.
- 佐野愛子(2017)「ベトナム社会科学院所蔵の「異国渡海御朱印帳」、「異国近年御書草案」、「異国御朱印帳」および「安南記」、「安南来状」について」『リテラシー史研究』10号. Sano Aiko(2017) Vietnam shakai kagakuin syozō no ikoku tokai gosyūincho, ikoku kinnen gosho soan, ikoku goshyūincho, oyobi annanki, annanraijyō ni tuite. *Literasi-shi kenkyu* vol.10
- 芝崎厚士(1999)『近代日本と文化交流』東京：有信堂. Shibasaki Atushi(1999) *Kindai nihon to bunka koryū*. Tokyo：Yushindo.
- 杉山直治郎(1944)「ノエル・ペリーの生涯と業績」『日仏文化』9集. Sugiyama Naojiro(1944) Noeru peri no shogai to gyoseki. *Nichifutu bunka* vol.9.
- ハルオ・シラネ、鈴木登美編(1999)『創造された古典』東京：新曜社. Haruo Shirane(1999) *Souzo sareta koten*. Tokyo：Shinyōsha.
- 森川甫(1983)「フランスの日本研究」『関西学院大学社会学部紀要』46号. Morikawa Hajime(1983) France no nihon kenkyu. *Kansai gakuin daigaku shakai gakubu kiyō* vol.46.
- 藤原貞朗(2002)「20世紀前半期におけるアンコール遺跡の考古学と仏領インドシナの植民地政策」『日本研究』26号. Fujiwara Sadao(2002) 20seiki zenhanki ni okeru anko-ru iseki no koukogaku to futuryō indoshina no shokuminti seisaku. *Nihon kenkyu* vol.26.
- 藤原貞朗(2014)「大戦間期の日仏会館の東洋学者とフランス極東学院」『日仏文化』83号. Fujiwara Sadao(2014) Taisenkankei no nitifutu kaikan no touyogakusya to furansu kyokuto gakuin. *Nitifutu bunka* vol.83.
- 古川久(1962)『歐米人の能楽研究』東京：東京獅子大学学会. Furukawa Hisashi(1962) *Oubeijin no nōgaku kenkyū*. Tokyo：Tokyo shishi daigaku gakkai.
- 山下太郎(1941.8)「極東フランス学院図書館に就て」『図書館雑誌』. Yamashita Taro(1941.8) Kyokuto furansu gakuin toshokan ni tuite. *Toshokan zasshi*.
- 尹大栄、李美智訳(2010)「1930-40年代の金永鍵とベトナム研究」(『東南アジア研究』48巻3号. Youn Daeyeong, Lee Miji, 1930-40 nendai no Kim Yung-kun to Vietnam kenkyū. *Tōnan ajia kenkyū* vol.48(3).
- 渡辺匡一(2017)「ベトナム社会科学院・旧フランス極東学院日本語資料調査の経過報告」『リテラシー史研究』10号. Watanabe Kyoiti(2017) Vietnam shakai kagakuin kyu furansu kyokutogakuin nihongosiryō tyōsa no keikahōkoku. *Riterasishi kenkyū* vol.10.
- 和田敦彦(2014)「ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院資料—東南アジア地域の日本語図書調査から—」『リテラシー史研究』7号. Wada Atuhiko(2014) Vietnam shakai kagakuin shōzō kyu furansu kyokutogakuin shiryō-tonanajia tiki no nihonngo toshō tyōsa kara. *Riterashi shi kenkyū* vol.7.
- 和田敦彦(2018)「在仏日本文化会館関係資料について」『リテラシー史研究』11号. Wada Atuhiko(2018) Zai futu nihonbunka kaikan kankei shiryō ni tuite. *Riterashi shi kenkyū* vol.11
- “Japon”, L'École Française d'Extrême-Orient. Depuis Son Origine Jusqu'en 1920. Le Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient, XXI, 1922.
- L.Aurousseau, “Claude Eugène Maitre”. Le Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient, XXV, 1925.

中野綾子 Ayako NAKANO

(日本) 明治学院大学非常勤講師。日本近代文学、出版文化史。「緩やかな動員のためのメディア—陸軍発行慰問雑誌『兵隊』をめぐって」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』(別冊)(第24—1), 2016.9)、「『編集された日記』における学徒兵の読書行為—学徒兵遺稿集と阿川弘之『雲の墓標』をめぐって—」『日記文化から近代日本を問う』(東京：笠間書院, 2017)など。